

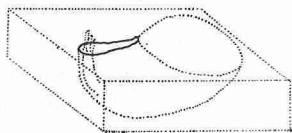
広報

— 7 卷 4 号 —

昭和 50 年 5 月

目 次

北京の春	弥 永 昌 吉…(2)
固体表面の触媒作用について	田 丸 謙 二…(3)
大学構内向ヶ丘貝塚	渡 辺 直 径…(4)
「キリンのまだら」を読んで	清 水 文 子…(7)
学術情報検索システム	
TOOL-IR の公開について	藤 原 鎮 男…(8)
私の読んだ本(20)	朝 野 洋 一…(9)
「大学を開く」	
《学部消息》	(11~14)



岩手県宮古地方の白亜紀層産矢石 *Neohibolites* sp. (×1.4)
とそれに *Trypetesa* sp. があけた穴

矢石 (Belemnites) は鉄砲の弾丸のような形をした石灰質の棒で、新生代初期に絶滅したイカの仲間間の外套につつまれた甲羅の先端部 (鞘) の化石である。甲羅には鞘につついてガスで満たされた多くの部屋からなる房錐と呼ばれる部分がある。そしてこの浮力のある房錐は口や腕のある頭部と鞘との間に位置してこの生物体のバランスを保つのに役立っていたらしい。

白亜紀の矢石の表面にはしばしば多数の細長い小さな穴があげられている。これはフジツボに近縁な甲殻類で貝殻に穴をあける尖胸目 (Acrothoracica) に属するツボムシと呼ばれる生物が住んでいた跡である。穴は矢石の全表面に一樣に分布し、しかも皆同じ方向を向いている。もしもこの生物が死んで鞘が海底に沈んだ後にツボムシが付着したのならば、穴は鞘の片面に限られ、又現在の海底の貝殻にツボムシがあけた穴と同様に、その方向もでたらめな筈である。そこである人はこの生物が生きて遊泳している時期にツボムシが付着し、水の動きに影響されて穴の方向がぎまぐまうと考え、それをもとにこの生物は成熟すると鞘を外套から外にむきだし、通常は口の方向に向って泳いだと推論した。しかし死後腐敗して軟体部がなくなった矢石が、ガスで満たされた房錐の上に重い鞘を下にして海中をぶかぶか浮遊していた時期に、ツボムシが付着したという可能性も考える必要があるようだ。

(花井哲郎: 地質)

北 京 の 春

弥 永 昌 吉 (数学・名誉教授)

3月末から4月初にかけ、2週間ばかり中国へ旅行した。吉川幸次郎氏を団長とする政府派遣の学術文化代表団に1員として加えられたからである。東大理学部に関係の近い団員として、茅先生や工学部の森口さんがおられたが、団員の中には人文科学方面の方が多かった。どうして私がこの‘代表団’に加えられることになったのか、私としては知る由もないが、昨年中国から来られた同様の代表団の中に著名な数学者華羅庚先生がおられたので、私も再会することができれば、と思った。また北京大学の段学復先生とは専門分野も近くかねて文通もあった。東大数学教室出身の劉璋温君も北京におられることを知っていた。私はずっと前——1931年と1934年に——昔の中国を通過したことがあるだけで、中国は私にとって未知の国であったが、機会があれば知りたと思っていた。中国出身で現在カリフォルニア大におられる数学者陳省身氏も、このごろはときどき中国へ帰られ、その途次日本に立寄ってゆかれる。そのほか前から知っている欧米の数学者で中国へ行かれた方もあり、そのお話も伺っていた。彼我学術交流を図るのは、もちろん結構なことなので、外務省からこの訪中団に加わらないかとのお話のあったとき、すぐ承諾したのであった。

日中両国は、一葦帯水とも同文同種ともいわれる一方、‘近くて遠い国’ともいわれている。国交回復や日中航空協定の締結等があつて、だいぶ‘近く’なつたとはいえ、社会制度が全くちがっていることは周知のとおりである。吉川団長も、両国の差違点をよく認識することから交流ははじまらなければならない、といわれた。

今度あちらへ行ってはじめて知つたのであるが、日中交流はもうかなり盛んに行われているようである。私たちが北京にいた間にも、日本からの何組かの訪中団に会つた。仙台市から来られた市長を団長とする百名以上の若い方たちの団体もあった。中国には対日友好協会というのがあり、そこで通訳、ホテル等のつごうのつく限り、日本側の希望に応じて受け入れられるだけは、次々と迎えているのである。

それでもまだ中国のことは、日本の一般の方々にとつて‘珍しい’のであろう。吉川団長は、朝日新聞に、曾野綾子さんはサンケイ新聞に報告を書いておられた。私も東京新聞に求められて、‘自然科学部門の日中交流’について書いた(4月17日夕刊)。その他にも、新聞雑誌

に出た記事やこれから出る記事があることであろう。先日、小堀さんに会つた折‘北京の春’という題で、理学部の‘広報’に書いて下さいませんか、といわれた。短いものなら、ということでお引受けした次第である。

——お引受けしたまでのことが長くなってしまった。東京新聞に書いたことをそのまま繰り返してもしかたがないし、専門的なことや細かいことは他の機会に譲つて、ここではごく大まかな一般論だけを書くこととしよう。

第1に、社会制度の差違のことである。北京でも、そのほかの町でも、町角の目につくところに‘毛主席万才’といったこと、あるいは毛主席語録からのことばが大きく書かれている。こちらの新聞で、ある大学の中国語の先生(中国系の方)が‘毛主席万才’というようなことをいわたのに対し、同じ大学の他の(日本人の)先生が非難されたという記事を見た。中国の新しい憲法(第13条)には‘大鳴、大放、大弁論、大字報、是人民群眾創造的社會主義革命的新形式’とあり、あらゆる批判を歓迎しているようであるが、‘社会主義’とか‘毛主席万才’は、中国ではやはり公理のようになっているのではあるまいか。

第2に、こういつた異なる制度下における交流は可能か、ということがあつた。東京新聞にも書いたことであるが、自然科学の方面では、人文科学方面などと比べて、すぐにも交流にとりかかることができそうである。中国でも生産を高めて全人民の住みやすい国を建設することを目標とし、そのためには自然科学が有用なこと、あるいは必要なこと、が認められているからである。そして‘科学に国境はない’からである。

第3に、しかし‘それだけでよいか’の問題がある。すなわち、住みやすい社会の建設に役立つ限りの意味においては自然科学上の交流をするが、‘気持ちの通じ合う’ことまでは考えなくてよいのか、ということである。私としては、それではやはり淋しいと思う。科学を通じての交流からでも、相互に学ぶべきところは学んで、‘人としての交流’ができるように、なるべく早くなれば、と思うのである。

私たちの訪れた北京は、春というにはまだ早かつた。楊柳未だ芽生えず、というところであつた。本当の‘春’が早くくればよいが、と思うのである。(1975.4.29)

固体表面の解媒作用について

田 丸 謙 二 (化学)

「表面をよそおう」とか「猫をかぶる」とかいう表面があるように、表面と中味とが違っていることは珍しいことではない。水素化物も作らない金属(ニッケルなど)でもその表面は水素と容易に化学的に結合してNi-Hの結合を作り吸着が起こる。その吸着水素が高い反応性を示す時、水素添加反応などの触媒作用がみられる。(他方、カドミウムや亜鉛、銀などは水素を吸着しない。)

タングステンや鉄(アンモニア合成触媒の主成分)は窒素を化学的に吸着するが、同じ遷移金属でも白金などは吸着しないアンモニア合成の触媒にはならない。単に吸着するしないだけでなく、同じくする場合でも金属によって吸着状態が異なることも少くない。赤外分光法

で認められたことであるが、白金や銅では主に $\begin{array}{c} \text{O} \\ || \\ \text{C} \\ | \\ \text{M} \end{array}$ のように、パラジウムやニッケルでは $\begin{array}{c} \text{O} \\ || \\ \text{C} \\ / \quad \backslash \\ \text{M} \quad \text{M} \end{array}$ のように吸着し

ておる。それらを水素で還元してメタンを生成する反応は後者のグループの金属の上で起こる。反応が起こる起こらないだけでなく反応の選択性が触媒の種類によっていちじるしく異なるのである。つまりきわだって specific なのである。このような固体表面の specificity が表面のどのような性質と結びついたものであるかということは、ほとんどわかっていない。

固体の表面原子は中味のものに比較して一般に量が少しいし、超高真空下で実験をしないと、残留気体からの汚れが表面を容易にカバーして表面の性質を大きく変化させるし、固体の中の不純物(たとえば微量の硫黄)が比較的容易に表面に濃縮されてしまう。表面の実験そのものが非常に労力、注意と技術を必要とされるのはそのためである。従来、触媒作用についても実験値そのものの再現性が常に問題であったのはこのような表面の敏感さとそれを調べる手段が乏しかったことに原因している。实用触媒でも何か微量を添加すると触媒活性が飛躍的に向上したり、あるいはその調製の仕方、リレキによりいちじるしく異なった活性を示すことが沢山ある。それも何故かわからないままになっていた。

最近、電子分光などの技術が急速に進歩し、固体の表

面に関する情報が増えつつある。固体表面に電子、X線、紫外光、イオン等を照射して、それにより表面から放出される電子のエネルギーなどを調べる手法である。低速電子線回折 (LEED)、電子エネルギー損失分光 (ELS)、オージェ電子分光 (AES)、紫外光電子分光 (UPS)、X線光電子分光 (XPS)、イオン中和分光 (INS) などであるが、電子は固体の中を透過する距離が短いので極く表面から出てくるものだけが放出される。例えば特定の波長の光を照射して放出される光電子のエネルギーを実測してその電子の結合エネルギーを調べることができる。これら各種の方法により、表面原子の幾何学的配置 (LEED)、化学組成 (AES)、表面のバンド構造 (UPS) などの電子エネルギー図など明かにされるだけでなく、吸着前後におけるそれらの変化などから結合性軌道などが明かにされる。

たとえば、パラジウムと銀の合金において、その表面の組成は中味の組成とはっきり異なり、銀が多くなっていることがわかる。しかしそれに一酸化炭素が吸着すると、一酸化炭素はパラジウムと仲がよいので、パラジウムが表面に引き出されてくることが観察される。

室温でモリブデン上にアンモニアを吸着させるとアンモニアの N-H が解離することが、高分解能オージェ電子分光により明かにされる。鉄の表面に 100°C では窒素は解離しないで吸着するが 400°C では原子に解離して吸着する。各種気体と金属との結合性軌道も明かになりつつある。

触媒作用と言えば、自然界でも酵素や光合成など莫大な量の反応が進んでいる。化学工場においてもその大半の反応は触媒の助けをかりて進んでいる。今日人類の将来にたちはだかるいくつかの深刻な制約である資源、エネルギー、汚染の問題など、に対処する知恵の一つとして触媒作用はますます重要になると考えられている。しかしその本性は少しずつわかりかけてはいるもののまだまだわからないことだらけである。わからないものほど魅力があるのかも知れない。秘密のヴェールが解かれて行く時のスリルがある。そして、ひょうたんの肌(表面)をなでなでしていた清兵衛の満足感がただようのである。

大学構内向ケ岡貝塚

渡 辺 直 径 (人類)

今年の1月文化庁から、人類学教室に保管されている弥生式壺形土器を国の重要文化財に指定したい、という申し入れがあった。この土器は明治17年(1884)に、当時大学予備門の生徒で、後の工学部教授有坂紹蔵先生が、向ケ岡貝塚から発見され、後に弥生式土器の名称の因になった、由緒ある標本である。文化庁の係官と談たまたまこの土器の発見地のことに及んだが、実は、向ケ岡貝塚そのものが幻の遺跡となつて、既に久しいのである。

土器の発見から5年後の明治22年(1889)に、当時大学院の学生で、後に人類学教室の初代教授になられた坪井正五郎先生が、「帝国大学の隣地に貝塚の跟跡有り」という報告を東洋学芸雑誌に発表された。この大学隣地の貝塚というのが向ケ岡貝塚のことで、その位置は「僅かに一筋の往来を隔てたる大学の北隣、即ち旧向ケ岡射的場の西の原、根津に臨んだ崖際」とあり、「当今貝の散じて居る所から上野公園を望んだ景」が、ここに転載した先生の筆になるスケッチで示してある。例の壺形土器についても、石版図を入れて、形態文様の詳しい記載がしてあるが、発見の経緯や地点のことは何も触れていない。当時この貝塚は、「地均らしの為日々人夫が往来するので、踏みにじられる事甚しく、將に其の跡を失わんとして」おり、「思ふに此の文が東洋学芸雑誌に載つて、読者諸君の目に触れる頃には、此の貝塚は殆んど知れない様成つて仕舞ふでござりませう。」という状態であった。

当の発見者の有坂先生は、土器発見から40年もたった大正12年(1923)に、はじめて発見の模様を人類学雑誌に、次のように書きのこされている。「向ケ岡と云ふ場所は、大学の裏門の道を矩てた通りの向ひ側で、根津の街を眼下に見る丘であるが、今日では弥生町の街が建つて、遺跡の正確な位置は解りません。其の頃弥生町と云ふ街は無かつた。裏門の筋向ひには陸軍の射的場があつて、其の西北の方に貝塚が根津の裏の高い丘の上にあつた。其の辺は一面の草原で、当時は家など一軒もなく、兎、雉などが居り狐が出た淋しい処でありました。私はこの向ケ岡の射的場へ時折遊びに行きましたが、此のうしろの草原のところ貝塚を見付けました。」「(そこは)風景の極めて良い処で、上野の森や不忍池を望ん



景々望ヲ園公野上リヨ塚貝岡ケ向

でいる、非常に気持ちの良い緑の丘でありました。17年3月1日に坪井、白井両君と知己と成つたその翌日、一緒につれだつて向ケ岡の貝塚に行つて見やうではないかと言ふので、行つて見たところが、其の時もかなり色々な物を掘り得ました。此の日私はふと貝塚の表面に壺の口が貝のなかから出てをるのを見出し、これをなほ抜き出して見ると、この壺が出ました。」「この壺は共同研究の材料として、坪井君の処に預けました。これが弥生町から出たと云ふので、後に弥生式と命名されたのであります。」ここでも、土器の発見地点については、詳しいことを述べておられないし、遺跡の正確な位置すらもはやわからない、と発見者自身が云つておられるのだから、まさに迷宮に入ったのである。

それでも、昭和になつて弥生式土器の研究が盛んになるにつれて、元祖の土器の出土地点を何とかしてつきとめようという努力が、多くの研究者によって重ねられた。昭和31年(1956)には、東京都教育委員会が、例の土器の発見地を都の史蹟に指定したいというので、農学部の構内を数ヶ所試掘したことがあるが、思わしい収穫はなかつた。止むなく東京都は、幻の遺跡を史蹟に指定して、弥生門から出て左に上る坂道が、根津から本郷通りに向う言間通りと合流する地点の農学部側に、由来を記した立札をたてた。教育委員会がこの地点を選んだ根拠は確かめていないが、恐らくさきに引用した坪井先生の「射的場の西の原」という記述と関係がありそうである。その立札は、その後道路拡張工事の際に取り払われ、現在弥生門の方に下る坂道の途中に移されている。また、数年前東京都の町名整理が行われた際、文京区は弥生町の名称を廃止しようとしたところ、この由緒ある町名を変更するとは何事であるかと、地元住民を中心とする猛反対に出会つて、結局弥生町の町名は安泰であつ

0

m
500

明治16年測量同19年製版同20年8月26日出版

第4号 東京北部(本郷及小石川)

參謀本部陸軍部測量局 五千分之一



た。そのとき反対運動の旗頭で、数年前停年退官された工学部の太田博太郎教授は、もともと弥生町の住人であるが、向ヶ岡貝塚と壺形土器の出土地点について、綿密な考証を試みられている。

処で、このたび文化庁からの申し入れに関連して、昨年来文学部考古学研究室に、旧浅野邸地区の一部から土器片や貝殻が出土する、という情報が入っていることがわかった。工学部 9 号館つまり総合試験所の建物の東側、崖ぎわの小高くなっているところで、昨年倒れた立木の跡に遺物が露出して、小中学生が崖をよじのぼって来ては、拾い集めているというのである。文化庁からの申し入れを機会に行ってみると、たしかに貝の層があって、土器の破片も散らばっている。しかも、その場所は工学部の建物建設予定地で、4 月には着工する運びになっていることがわかった。そこで、文学部考古学研究室と協同で、その場所の緊急発掘を行ったところ、攪乱されていない貝層の一部や、弥生時代の遺跡によくある溝の遺構などが現われた。また、5 個体分のかかなり大きな土器の破片がひと塊りになってみつかったが、いずれも明治 17 年発見の土器と極めてよく似ており、同型式に属することは疑いない。これらの土器片は、文学部考古学研究室で目下復原中で、来る五月祭に展示するため、学生達が張り切っているそうである。

この新しい発見によって、有坂先生が壺形土器を発見された地点は、この附近である公算が大きくなった。従来、諸家によって推定されていた向ヶ岡貝塚の位置は、上記の東京都が史蹟の立札をたてた辺りと、言問通りを根津の方へ下る坂道の北側の数地点が主である。今回遺跡の発見された地域は、もと水戸藩の下屋敷のあったところで、明治 20 年代には浅野家の邸となり、みだりに立ち入ることができなくなった。この邸内の遺跡がその後探索されなかったのは、こうした事情によるのかもしれない。根津へ下る坂道の北側の丘には、たしかに土器や貝殻の散布している地点があるが、縄文土器が主で弥生土器は極めて稀である、というのが大方の一致した所見である。この丘と旧浅野邸の丘とは、元来一連の丘であったものが、道路や建物建設の際にその間が深く削られて、今では窪地となっている。今回発掘した遺跡の続きが、この削られた丘の上に延びていたことは明らかであるが、今となってはその拡がりを知る由もない。壺形土器の発見された地点としては、少なくとも今までに推定されたどの地点よりも、今回発掘を行った地域の附近が最も有力である。

3 月の末、壺形土器は、同じく人類学教室に保管されている、明治 10 年 (1877) モールス教授が大森貝塚で

発掘された遺物とともに、国の重要文化財に指定されることが決った。同時に、文化庁では今回の向ヶ岡貝塚の新しい発見に強い関心を示して、東京大学からの申請があれば、その地域を国の史蹟に指定するという意向を明らかにしている。わが国の先史学史上記念すべきこの貝塚が、国の史蹟として永久に保存されるならば、これに越したことはないので、関係方面の了解をえて、然るべき措置を総長にお願いした。工学部もこの遺跡を保存することに賛同して、予定されていた建物建設計画の一部を急遽変更して、その地域を国の史蹟指定地域とすることを、総長に具申した。これが実現すれば、コンクリートで覆われた旧浅野邸地区に、僅かな面積ではあるが、辛うじて緑がのこることになるだろう。東大百年史にも書きのこす記事が一つふえることになる。

ここに掲げた地図は、先年亡くなった人類学教室の山内清男講師が苦心して蒐集された、明治以降各版の参謀本部陸地測量部地図のうち、明治 16 年測量、19 年製版の 5 千分の 1 の地図から、本郷附近をやや縮小して転写したものである。有坂先生が壺を発見された前の年の測量であるから、上に引用した坪井、有坂両先生による、向ヶ岡貝塚の位置の記述と比べるのに都合がいい。当時の大学裏門は今日の弥生門に当り、それに続く大学の敷地の境界はほぼ現在のものと一致している。現農学部の南から東にかけての境界も、大体この地図の土塀の線に合致するようである。今回発掘を行った場所は、地図の上に印を入れなかったのでわかりにくいかもしれないが、射的場の北にコの字型の家屋のあるところからすぐ西北方の、崖ぎわに立木の記号が集っている附近である。最近、文学部考古学の佐藤達夫助教授が、丹念に文献を調べ現地を踏査して、「向ヶ岡貝塚はどこか」という短い論考を、雑誌「歴史と人物」の 6 月号に寄稿されている。

序でだが、近く恒例の理学部ビアパーティーが催される植物園には、明治の頃小石川植物園内貝塚とよばれた有名な貝塚がある。明治 10 年 (1877) のモールス教授による大森貝塚の発掘が刺戟となって、理学部生物学科ではにわかには貝塚熱が盛んになった。植物園構内の貝塚は、明治 11 年 (1878) に、植物学の矢田部良吉教授によって発見されたもので、同年 12 月モールス先生も加わって発掘が行われた。貝塚の位置は、例年ビアパーティーの開かれる本館西側の草地と大温室との間の、道路で狭まれた芝生のところである。今でも注意して探せば、縄文土器の破片や、縄文人が盛んに採集し、その後東京湾から姿を消した、ハイガイの殻などを拾うことができるだろう。

「キリンのまだら」を読んで

——平田森三先生の思い出——

清水文子 (物理 OB)

「キリンのまだら」(中央公論社, 1975) は 1966 年に東大物理教室を定年退官された直後に慢性白血病でその生涯を閉じられた平田先生が、生前に書かれた文章の中から一般向きのものをいく篇か選び、先生の弟子の一人である兵藤申一氏によってまとめられたものである。先生に親しく教えを受けた学生の一人として、この本をひろく紹介させて頂くとともに、先生の遺徳をしのびたいと思う。

平田先生が寺田寅彦の高弟の一人であることはよく知られているが、先生はその研究内容にとどまらずいわゆる寺田物理学の学風の真髄までも引きつがれた最後の方であろう。この本におさめられた「キリンの斑模様」を始めとする 13 篇のそれぞれから、広く多岐に渡った物理学のほとんどすべての分野で先生が、いかに優れた洞察力と直観力を持っておられたかを、またあくことのない自然科学の探究者であったかをうかがい知ることができる。

表題となっている「キリンの斑模様」は、キリンの斑模様がキリンの子が母親の胎内で成長していく過程で、内部の成長が表面の部分の成長に追いつかない時期に生ずる割れ目の一つであるという大胆な推論に始まる。そしてそれが自然界にみられる種々の斑模様——しましま、とら、ひょう、田んぼの干割れ、ウズラ豆——等の考察におよび、遂にはウズラ豆の実験的研究を生み、先生のライフワークである割れ目の発生と伝播を中心とする破壊機構の研究へと発展していったのである。1933 年の「科学」に「キリンの斑模様について」の論文が掲載された後、動物学者の反論につづくはなばなしい論争については兵藤氏の解説に詳しい。

「物質の表情」「割れ目について」では、主としてガラスの割れ目について、一様に熱したガラス板を冷水に徐々に沈めた時に生ずるもの、鋼鉄の球を衝撃させて生ずるもの等々、様々な方法によって発生した割れ目がそれぞれに表情の異なる有様が、多くの写真をそえて議論されている。ある質量をもったものが応力の場へ投げ出されてあちこち動くという簡単なモデルにもとずいて、割れ目が発生し伝播していく機構が丁寧に解説されている。特に放射線を照射するホットラボの大きいのぞき窓に生じた特種な割れ目についての一項は、当時平田研究

室の学生であった筆者が、東海村まで先生のお供をして写真撮影のお手伝いをさせていただいた時のことなどを思い出して感慨の深いものである。

「近路の観測」はいかにも先生らしいユニークな発想による興味ある物理的考察の一例である。東大構内には柵等を含めて芝生を横断する近路が到るところにあるが、これがどんな条件のところで発生するかについて先生が丹念に観測した結果について述べられたものである。柵に沿って普通に歩く場合の距離と柵を越えて芝生を横断して歩く場合の距離、柵の種類と高さを観測したデータが整理されている。勿論近路が出来る条件については物理的には一つの経験法則が成立つわけであるが、ここで種々のパラメーターが問題となる。ここでいうパラメーターとは柵を乗り越える際に消費する筋肉の仕事であったり、精神的仕事であったりする。面白いのはこのパラメーターが東大の中の人々の特質を示すものであることで、もし他の場所で類似の観測を行えば又それぞれの特色が出てくるであろうという感想が附されていることである。

「真つすぐ近路を通りたいのは万人の望みである。植込みや芝生がきれいに保たれていることも、おそらく万人の望みであろう。実際には、その両方の望みが釣り合う状態の下にいくつかの近路ができる。」という文章には、ただいちがいに近路を是とせずまた非ともしない立場で、物理的考察の合理性と、これこそ先生の人柄の根源ともいべき暖かさというものととの調和を感じずにはいられない。これは 1941 年当時の観察をもとにして 1955 年に理学会にニュースに発表された文章であるが、この中で 1955 年における構内の柵と近路との状況を観測する有志はないだろうかと書かれている。1975 年ではどのようなであろうか。先生のおっしゃったあのバランスはくずれているのではなからうか。

「サーカスにて」では、いわば簡単な力学の問題の中に人間の運動神経の非常に洗練された極致としての魅力がとらえられ、「鯨に銚を打つ」では、世界的に有名な平頭銚の発明に致った経過が生き生きと描かれている。この鯨との出会いが、後年の鯨のひげから鯨の年齢を推定するというこれもユニークな研究に発展していくのである。この発明の際に銚の代りに、水中で小銃弾を

発射させ、その進行の具合や水面に出て反跳する様子を調べる実験をされたが、あまり何回も耳の間近かで発砲したためにいつの間にかそれに耐えるべく鼓膜が厚くなって、大きな音に鈍感になられたという話は研究室ではかなり有名であった。なるほどガラスの衝撃破壊の実験の折、皆が耳を手で押えている中で、先生だけは平然と涼しい顔をしておられたこと等も思い出される。

ここで忘れてはならないのはこの本の副題「自然界の統計現象」にもみられるごとく、先生は生涯を通じて統計現象の研究を発展させていられたことである。先生はあらゆる自然現象の中に本質的に潜在している確率的な要素を的確に把握し、統計現象論に基づいた独自の方法でこれを解明して、簡潔な法則に帰納していくという卓越した直観力と能力とを持たれていた。既成の理論を用いて計算したり予測される事柄を説明したりするのではなく、身近かな事柄、一見何でもない事柄、何が何だかさっぱり解らない事柄を、物理の問題として取り組んで解明していくという真に物理的な人の姿を、この本におさめられたすべての文章からうかがうことが出来る。

かつて筆者が、衝撃破壊によるガラスの割れ目について山積みのデータを前にして、どうにも動きがとれずに四苦八苦していた時、先生は打てば響き返すような反応の速さで明確なアドバイスを度々して下さった。この偉大な物理学者である先生がいらっしゃる限り大丈夫だという大きな安心感が、研究室のどの人々の胸にもあったに違いない。その先生は余りにも早く亡くなられてしまった。

この本の最後の文「静寂」を読んで筆者は一瞬とまど

った。被爆の体験を自から筆にされていたことを少しも知らなかった。かつてそれは衆知の事実であっても先生の口からは直接お聞きしたことは一回もなかったからである。原爆の落ちた直後の想像を絶する悲惨な状況のもとでの異常な静かさをとらえたこの一篇は、1952年に書かれたものである。この体験はこの後、先生の心の中でどのような推移をたどったのであろうか。決して自からは語られなかったゆえに、研究室の人々は皆それを十分に疑いながらもあえて“原因が広島原爆にあるか知る由もない”等いつも歯切れの悪い言いわけをつけて、白血病による余りにも早い先生との別れを語るのが常であった。しかし筆者はやはり「静寂」を読んだ上でなお、先生とその後を追うように亡くなられた御長男とが共に被爆されていることを、しんそこから呪うものである。

この本からも十分にうかがい知れるような優れた業績と独自の学風と共に、その人柄の清潔さ、学生や弟子に対する思いやり、そして常に温い気持を持ってあらゆる人々に接しられた大らかさを思いおこす時、いまさらのように先生を悼む心を千万言をもってしても尽くすことはできない。

最後に「病院へ見えた寺田先生」の中から次の文を引用して私達の気持を表すことでこの筆をおこう。

「私は全く何もかも忘れてもっと勉強をして先生からさらに多くのものを学びとる自由が与えられていたのである。それが自分には果せなかったという悔恨の念が、先生が亡くなられてから歳が経つにつれて次第に強くなっていく。」

学術情報検索化学システム TOOL-IR の公開について

藤原 鎮 男 (化学)

東大大型計算機センター HITAC 8700/8800 システムに附置された高速大容量 (400メガバイト) のディスクメモリーを基幹とする学術情報システム TOOL-IR (Tokyo Univ. On Line Information Retrieval) が完成し 6 月 1 日から同センターの利用者にひろく公開利用願えることとなりました。利用法としては TSS, リモートバッチ, オープンバッチ, クローズドバッチなど種々の方法で検索可能であり、このうちとくに TSS による検索ではマンマシンインターフェース機能を生かして対話形式で検索

作業を進めることが出来ます。また多量で詳細な文献リストを得たいときは、バッチ処理モードで高速ラインプリンターをもちいれれば質問をパンチしたカードで入力したのち、あとでゆっくり結果をとり出すことも可能です。

このシステムは利用者が出来るだけやさしく簡単に利用しうるよう、それを第 1 に考えました。それで AND, OR, NOT などの質問形式のもとに質問語 (キーワード) を指示すれば簡単に検索が可能であります。

実例で説明しますと、たとえば、「アミノ酸の文献を

さがせという」質問をする場合には、SEARCH AMINO, AND ACID と指示しますと、この場合 AMINO と ACID はキーワードで、SEARCH と AND は質問の形式を指示するサブコマンドです。サブコマンドには、この他、DIF, DISPLAY, QSAVE, QUSE, KEEP, ENTER, EXTRACT, DUMP, REMIND, END のようなものがあります。このうち QSAVE は、自分のファイルに質問を貯蔵することで、ここに自分の情報ストックをつくっておき、QUSE のサブコマンドで、後日呼び出してつかうことが出来ます。こうしておく、自分に必要な1群の質問用キーワードをしまっておいて二度目からは一々新たに質問を指示しなくても質問を再行することが出来るわけです。

また KEEP サブコマンドは、検索結果を自分のファイルにたくわえておくものです。そして後刻必要になったとき、ENTER サブコマンドで内容を読み出し、印刷したり、さらにくわしい検索の出発点にすることが出来ます。また、PERMIT, SHARE, TRNF ないし RECVF のコマンドは検索質問ファイルや検索質問ファイルや検索結果ファイルの貸し借り、やりとりをゆるすもので、遠隔地間の研究者間の協力や、協同作業もこれによって簡単に実行しうることが期待されます。

さらに QUSE サブコマンドは誰でも、システムの質問ライブラリを利用できるようにしたもので、従って、個々の分野の専門家が作った検索システム、検索質問集を、専門外の人がよび出して、専門の人の思考に沿って検索をすすめることが出来ます。

システムは以上の内容をもっており、これで遡及検索と現況速報検索の両方を行なうことが出来ます。前者は現在、一年分のケミカルアブストラクツをファイルにおさめており、後者は2週間毎に新着のテープについて実施出来ます。遡及検索はゆくゆくは4年分を目標にしており、また、現況速報検索は私用ファイルを各自用意し

うるシステムなのでグループで計画すれば強力な研究補助となりましょう。現在収録されているデータベースはケミカルアブストラクツと、ケンブリッジ大学 X 線結晶データベースの二つですが、本年度中に計算機科学関係のデータベース INSPEC が加えられる予定です。システム側としては、システムの保護(たとえばメインディスクの保護、個人別、グループ別ファイルの保護)などやディスク容量の拡張など努力せねばならぬことが残っていますが、ともあれこの段階で一般公開をし、ユーザーサイドの質問ファイルの育成などをお願いしたいと考えております。利用マニュアルの請求や利用の照会は、化学教室藤原鎮男内線 3248 に御連絡下さい。また6月11日、12日計算センターで当システム利用のための講習会が開かれる予定であります。

以上、本システムについて御紹介申し上げ、この機会に今日までの本学部の関係各位、東京大学大型計算機センター、文部省特定研究助成金の御援助御力添えに深謝する次第です。

利用申込

下記要項を記入の上*、CAS データについては

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学理学部化学教室 藤原鎮男
Tel (03) 812-2111 内線 3248

X線構造データについては

〒113 東京都文京区弥生 2-11-16

東京大学大型計算機センター
センター長室 X線データ係
Tel (03) 812-2111 内線 3650

にお申込下さい。

* 記入事項

氏名、電話番号、東大センター課題番号
専門分野または主に興味のある分野

私の読んだ本 (20)

飯田宗一郎 編著

「大学を開く——大学セミナー・ハウス創立十年史・開館七年史」

(財団法人大学セミナー・ハウス 1974)

朝野洋一 (地理)

近郊ハイキングコースとして御馴染だった多摩丘陵は野猿峠の南側に「大学セミナー・ハウス」が開館したの

は1965年7月であった。1972年11月には、財団法人創立10周年と開館7周年の記念行事が催された。本書

は、その記念出版物の一部であるが、1974 年末に発行されたから、正確には創立 12 年史・開館 9 年史というべき内容となっている。全編 300 頁足らずの書物であるが内容は豊富で、一個人が諸々の困難を排し自己の理想を実現してゆく感動的ドキュメントと当代一流の学者・教育者が折りにふれて開陳する大学論の 2 本立てとみることができる。この 2 本立てについては、書名にもいえることである。「大学を開く」とは、いろいろな面で閉鎖的な日本の大学を開いて、大学間の交流・連帯をつくるということである。しかし、一方では、国の補助と財界の援助と大学関係者の熱意によって存続しているユニークな教育機関、人呼んで「飯田学園」を開設・運営するという意味にも受け取れるのである。

教師と学生が豊かな自然環境の中で起居を共にしつつ学ぶセミナー・ハウスの建設は、飯田宗一郎（創立以来長らく専務理事を務め、現在館長）という一個人が、1959 年当時の大学教育の現状を見て、一体これでもものだろうかとの疑問を持ったことに始まる。当事者なら誰れしも懐く疑問であろう。氏の前歴は詳しく書かれていないが、同志社大、東京女子大、ICU など、キリスト教関係の大学で、大学行政に携ってこられた方ときく。新制大学における大学教育、とりわけ一般教育を中心とするマス・プロ教育には人と人の触れあいが欠けていると感じた氏は、インター・ユニバシティの合宿研修センターを設け、これによって大学の理念と実態との橋渡しをしようとの構想を持った。そして、まず同信の（氏はクエーカー派の教会に属す）女子大学長に相談したところ、在京の有力国立・私立大学長にも話が通じ、次第に理解者が増え、遂には財界から募金するに至る。この間の事情は、第 1 章「知らざる径を歩む——創立以前のこと——」に述べられている。60 年安保闘争の前後で、大学も落ち着いた頃である。我が国では未だ知られていなかった構想を多くの大学関係者・財界人・役人にまず理解してもらい、大蔵省の許可を得て財団を設立し、文部省と交渉して補助金を獲得し、財界からの寄付を募り、建設予定地を物色するなど、氏にとっても全く未知の世界での仕事であったから、その苦勞たるや「前例のない事業を開拓する場合によく経験することである」と簡単に述べられてはいるが、実は大変なもので、家族をも巻き込んでしまっている。信頼感あふる豊かな人間関係、周囲の人々の理解と協力といった好条件がそろっていたにしても、熱意と努力はすさまじい。募金にあたっては、足掛 4 年の間に 40 余の業界団体、200 余の銀行・会社を訪問したという。

さて、開館した施設は、「よき若木若芽の育てて——

開館から七年の歩み」（第 3 章）、「敏びの歴史を作る」（第 4 章）で述べられているように、何度かの募金・施設の充実を経て着実に発展し、全く予期した通りの効果を発揮するようになる。会員協力校数は、当初 18 校であったが、1974 年には国公私立合計 40 校にもなった。「セミナー・ハウスをいつも自主的な経営体にしておくためには、人間の善意によって支えられる維持後援会の組織が必要である」という飯田の発案により、江戸時代の八王子千人同心にあやかって発足した「千人会」の会員も、間もなく 1000 人になろうとしている。74000m² 余のキャンパス内には、逆四角錐の、楔を大地に打ち込んだ姿の本館・食堂棟、サービスセンター（浴室・売店）、中央セミナー館、宿泊施設のユニットハウス群（7 群、各群は 10 個近いユニットハウスとセミナー室から成る）、講堂兼体育館、図書館、教師館、長期セミナー館、テニスコート、野外ステージなどが、丘陵の地形を巧みに生かし、風景を損わないように配置されている。開館以来 1973 年までの利用状況は、ゼミナール開催 6,188 回、宿泊延人数 291,063 である。ここで開かれるゼミナールは、最も一般的なのは大学教師とその指導学生によるものだが、セミナー・ハウスの企画する大学共同セミナー、国際学生セミナー、大学教員懇談会などがある。このうち大学共同セミナーは、ここの看板ともいえるもので、全国の大学から、参加者を募集する。1974 年 3 月までに既に 66 回開催され、参加学生延 5,334、開催日数 164 日、指導教授陣 579 人となっている。特に一般教養に重点を置くが、テーマは実に様々であり、いずれも高い学問水準と広い教養のうかがわれるものばかりである。参加学生や教師から寄せられた感想文には、恵まれた環境下で教師と学生が宿泊しつつ学ぶことのすばらしさが余すところなく述べられており、セミナー・ハウスの使命が申し分なく果されていることを実証している。

本書の特色の一つに、関係者・参加者に語らせるということがある。飯田は冒頭で、自分ですべてを書かないのは、書こうとすることが「心には溢れるも、……、永久に消えることのない感動の一つ一つがあざやかに思い出されて、誇張した表現になることをおそれる」ためであると述べているが、創立から現在に至るまでの各種ドキュメント、催物の来賓あいさつ、新聞・雑誌等の関連記事を上手に配列して自己の主張を表現しているのは見事である。また、この裏には、セミナー・ハウスに関することなら何でも収録しておこうとする職員諸氏のセミナー・ハウスに寄せる愛情がうかがえるのである。ただ、ここで気になるのは、関係者の書いたものや新聞の

記事の中に、セミナー・ハウスをして大学改革問題のいわば「新幹線方式」に位置づけようとの論調がうかがえることである。時を経て大学の置かれている状況も変化し、セミナー・ハウスの運営・企画に携わる人々にも交替はあったろうが、少くとも飯田の発想の中に、また初期の賛同者の考えの中には、このような意図はなかったと思う。近年、各地に単独の大学で類似の施設を持つ例が多いと聞くが、セミナー・ハウスの理念・実践が既成大学の改革へのモデルとはされても、これを以って免罪符とされてはならないと思う。

筆者は過去何度かセミナー・ハウスを利用させていたが、横田基地に発着する大型輸送機の爆音に討論や眠りを妨げられたことを想い出す。財界の寄付で完成したと聞かされた施設に泊りながらヴェトナムや沖縄との間を頻繁に往来する軍用機を間近に見るのはすっきりしないと友人と苦笑しあったものだった。ヴェトナムによろやく平和が訪れた今、夜のゼミナール室に聞えてくるのは、虫の音、風の音のみであろう。静かで美しい環境が、もう間近かまで迫った宅地造成・分譲住宅地により破壊されないよう祈りたい。

〈学部消息〉

4 月理学部会合日誌

- 9 日 (水) 会計委員会 1.30~4.40
- ” ” 教務委員会 1.30~2.30
- 11 日 (金) 主任会議 3.30~5.45
- 14 日 (月) 理系委員会 2.00~4.50
- 15 日 (火) 人事委員会 3.00~4.00
- 16 日 (水) 教授会 2.00~5.50
- 28 日 (月) 主任会議 4.00~5.00

教授会メモ

4 月 16 日 (水) 定例教授会
理学部 4 号館 1320

教授会にさきだち、藤井忠男教授が「Real photon と Virtual photon」と題する講演をされた。

1. 前回議事録の承認
2. 人事異動等の報告
3. 人事委員会報告 (末元)
4. 会計委員会報告 (佐佐木)
5. 研究生の期間延長及び入学について
6. 転学科について
7. 日本学術振興会奨励研究員の受入れについて
8. 科学研修員の受入れについて
9. 教務委員会報告 (花井)
10. 放射線管理体制について (斉藤)
学部の放射線管理委員がきまった。
11. 学内規律の件についての報告 (大木)
12. カリキュラムの件について (大木)
13. 全学建築委員会の報告 (植村)
14. 総合大学院構想について (植村)

将来計画委員会から学部長あての報告があり討論された。

教室主任・施設の長

数	学	○岩 堀 教 授	○印 新
情	報	○後 藤 教 授	
物	理	佐々木 教 授	
天	文	末 元 教 授	
地	物	○浅 田 教 授	
化	学	○朽 津 教 授	
生	化	野 田 教 授	
動	物	○江 上 教 授	
植	物	○飯 野 教 授	
人	類	○埴 原 教 授	
地	質	○木 村 教 授	
地	物	竹 内 教 授	
臨	理	○吉 川 教 授	
海		○寺 山 教 授	
植 物 園		○下 郡 山 教 授	
地 物 施		福 島 教 授	
高エネルギー		小 柴 教 授	

新 委 員 表

評 議 員	植村, 下郡山, 田丸
幹 事	下郡山, 田丸, 佐佐木, 末元, 有馬
人 事 委 員	末元, 伊藤, 稲本, 古谷, 宮沢 (弘)
会 計 委 員	佐佐木, 岸保, 飯野, 田村, 江上, 宮沢 (辰)

教 務 委 員	朽津, 伊原, 霜田, 鈴木(秀次)	カリキュラム 検 討 委 員	大木
将 来 計 画 委 員	齊藤(正), 佐伯, 花井, 井上	山上会議所委員	寺山
学 生 委 員 (全学)	黒田, 小松, 小柴, 海野, 大 木, 江上, 古谷, 飯島, 後藤	アルバイト委員	荒田
” (理)	永田(豊)	東大百年史委員	田丸
学 寮 委 員	有馬, 尾本	アイソトープ委員 (全 学)	酒井
教 職 課 程 委 員	高倉	放射線管理委員	齊藤(信), 鈴木(秀次), 酒井, 代谷, 中井
教 養 連 絡 委 員	竹内(均)	環境安全委員(全学)	藤原
図 書 行 政 委 員	朽津	” (理)	高橋(武), 飯田, 宮沢(辰), 山 上, 下郡山, 武田
広 報 委 員 (全学)	藤原	入試制度検討委員	岩堀, 荒田
” (理)	和田(靖)	学内規律専門委員	大木
外 国 人 学 生 委 員	小堀, 木下, 猪木	改 革 室	和田(昭)
学 生 相 談 所 委 員	齊藤(信)	総 長 補 佐	藤井(忠)
学 生 保 健 委 員	高倉	院, 協 議 会	植村, 末元, 野田
奨 学 委 員	堀田	院, 学 生 委 員 (全学)	木村(敏)
英 文 カ レ ン ダ ー 委 員	佐藤(久)	院, 奨 学 委 員	水野
ガ イ ダ ン ス 委 員	山本(祐)		
臨 カ リ 委 員	朽津		
	霜田		

人 事 異 動

(助 手)

教室	官 職	氏 名	発令年月日	異 動 内 容	備 考
化 学	助 手	西 浜 忠 明	50. 3. 31	退 職	明治大学助教授
物 理	助 手	井 森 正 敏	50. 4. 1	高エネルギー物理学 実験施設に配置換	

4 月 海 外 渡 航 者

所属 地 質	官 職	氏 名	渡航先国	渡航期間	渡 航 目 的
	教 授	立 見 辰 雄	ドイツ連邦共和国	4. 1~ 4. 8	IFSEG 会議及び SGA- GDMB 共催金属鉱床成因 論会議出席
物 理	教 授	西 島 和 彦	イタリア ドイツ連邦共和国 ドイツ民主共和国	4. 1~ 7. 18	素粒子論の研究
植 物	教 授	古 谷 雅 樹	連合王国 フランス ドイツ連邦共和国	4. 1~ 7. 20	「光と発生」国際会議出席及 び植物細胞におけるフィト クロムの分布と作用機構に 関する研究実施
化 学	教 授	向 山 光 昭	アメリカ合衆国	4. 3~ 4. 21	アメリカ化学会年会出席及 び研究連絡
人 類	講 師	西 田 利 貞	タンザニア ザイール	4. 10~ 51. 4. 15	中近東およびアフリカに対 する技術協力計画における 霊長類動物の調査
物 理	助 教 授	有 馬 朗 人	アメリカ合衆国	4. 10~ 4. 25	原子核のクラスター構造に 関する第 2 次国際会議出席 及び研究連絡

臨海	教授	小林英司	ドイツ連邦共和国 ドイツ民主共和国	4. 11~ 4. 26	房脳室器官に関するシンポジウム出席及び研究連絡
化学	助教授	荒田洋治	アメリカ合衆国	4. 19~ 5. 5	第16回核磁気共鳴会議出席及び研究連絡
物理	教授	山口嘉夫	スイス アメリカ合衆国	4. 30~ 8. 30	レプトン光子の相互作用に関する国際シンポジウム出席及び高エネルギー物理学の研究

理学博士学位授与者

昭和 50 年 4 月 14 日付授与者

専門課程	氏名	論文題目
物理学	伊藤進一	Brillouin 散乱による $Gd_2(MoO_4)_3$ の研究
植物学	大沢雅彦	Differentiation of vegetation pattern in the subalpine region of Mt. Fuji 富士山の亜高山帯域における植生パターンの分化
学位規則第3条2項該当	宍戸文雄	半導体多層薄膜の輸送係数
同	山本彬也	列車とトンネルの空気力学
同	馬場澄子	放射化学的手法による ^{238}U の陽子核分裂の研究
同	藤野威男	ウラン, アメリカシウムおよびキュリウムの放射化学的研究
同	相川信之	X-ray Study of the Intergrowth of Rhodonite and Pyroxmangite 共存するバラ輝石・パイロクスマンガン石の X 線の研究
同	梅沢弘一	ウランの核分裂に関する化学的研究
同	荒谷美智夫	荷電スペクトロメーターとその応用に関する研究
同	森田康夫	An explicit formula for the dimension of spaces of Siegel modular forms of degree two (2 次のジーゲル・モジュラー形式のなす空間に対する次元公式)

進入学者について

学部進入学者については本年度は、例年の如き部長挨拶にはじまる進学式は行われず、代わりに「理学部広報-進学生特集号」が配布され、各教室で適宜ガイダンスが行われた。学科別の進学者数は次の如くである。

昭和 50 年 4 月 理学部進学者

数学科	46 名
物理学科	72 名
天文学科	7 名
地球物理学科	20 名
化学科	43 名
生物化学科	18 名
生物学科	動物学 8 名
生物学科	植物学 8 名
生物学科	人類学 4 名
地学科	地質学鉱物学 14 名
地学科	地理学 8 名

計 248 名

尚理学系大学院への入学者は、修士課程 208 名、博士課程 112 名であった。

職員永年勤続者表彰

昭和 50 年度の東京大学職員永年勤続者として理学部では川上幸男 (植物園), 藤木陽一 (地物), 松田正太郎 (化学) の 3 氏が表彰された。

向山教授の授賞

向山光昭教授 (化学) は、この度“生理活性物質の新合成法の研究”に対して、内藤科学振興財団より、内藤科学振興賞を授賞された。

国立十大学理学部長会議報告

第 43 回国立十大学 (北大, 東北大, 東大, 東教大, 東工大, 名大, 京大, 阪大, 広大, 九大) 理学部長会議が 4 月 23, 24 日の両日名大理学部で開かれ植村学部長, 吉野事務長が出席した。当番校である名大早川学部長を議長に主として次のような議題について検討や情況報告

が行われた。なお文部省からは大崎大学課長他一名が出席した。

1. 野外実習費の予算措置、野外実験・実習施設の整備等に関する問題
2. 事務官、技官の定員増と事務の簡素化について
3. 経常校費、特殊装置維持費の増額の問題点
4. 設備更新費、特別設備費等の問題点
5. 教官流動情況の調査結果とその報告
6. 建物の基準について、特に危険物貯蔵庫の取り扱いについて
7. 教員免許取得方法の問題点

以上の他、大学院設置基準の施行にともなう各大学の措置の進行情況、各大学の大学院拡充に関する将来構想等について説明や情報交換を行った。

これらの討議は当番校の責任で要望書にまとめられ関係方面に提出される予定である。(植村)

停年退職の佐々木信雄技官を送る

この3月停年退職された佐々木信雄氏は昭和19年茅教授と共に北海道大学から来られ、爾来通算25年間結晶解析の研究ならびに学生実験X線解析の指導に従事されました。同氏の指導は懇切丁寧で一々自らやって見せることで有名でした。

また教室随一の能筆家であると共に筆跡鑑定では素人の域を脱しておられるそうです。理職にも極めて熱心でしたから同氏独得のひょうひょうとした風貌に接しられた方も多いと思います。

今後の御健康と御活躍を祈ります。(桑原五郎)

助成金の推薦について

財団法人伊藤科学振興会研究助成金推薦について

(6月14日まで)

松永研究助成金贈呈候補推薦について

(6月16日まで、用紙は5月31日までに庶務掛)

RCA 助成金

(7月31日まで)

上記の通知がきておりますので、御関心をお持ちの方は庶務の浅沼さんまで御連絡下さい。

理学部職員学生懇親会の開催



5月12日(日)恒例のビア・パーティが小石川植物園で午後3時から開かれた。五月晴れの好天の下、新緑を賞でながら、多数の教官、職員、学生が参集し、春の一時をなごやかにおくることができた。

編集後記：理学部5号館の第一期工事が、四月末から、竜岡門近くの建設予定地で始まっています。“本郷の春”のいぶきを感じさせる力稿を以て、本号も無事刊行できたことを、著者の方々に厚く御礼申し上げます。好評の表紙連載写真は、本年は「化石」にいたしました。御愛読(?)を願います。又平田先生の思い出を書かれた清水博士の記事は、元来書評欄に頂いたものを、編集の都合上、本文に組み入れました。著者および読者の御了解を得たく存じます。なお同博士は、現在上智大助教授で、物理教室に御勤務です。「訂正」7巻3号(前号)16頁理学部卒業生(209名)は、(206名)に御訂正下さい。

編集：

小堀 巖	(地理)	理2号館 205号室	内線 6449
木下清一郎	(動物)	理2号館 22号室	内線 3361
猪木慶治	(物理)	理1号館 461号室	内線 2668